

心の栄養

先輩の 実習エピソード 教えて!

ハードな実習を通して、
心が折れそうになることも、
やりがいを感じる嬉しいときも
ありますよね。先輩たちも同じように、
いろいろな経験をしています。
ここでは、先輩たちの印象的な
実習エピソードをご紹介します。

「意識がなくても…」

ICUで実習していたとき、男性の患者さんを受け持ちました。患者さんは、腎臓がんの手術中に大出血、昏睡状態で鎮静薬・鎮痛薬を投与しているという危険な状況でした。「意識がない患者さんに何ができるだろう?」と看護ケアについて悩んでいましたが、指導ナースのアドバイスでケアのときは声をかけたり、空いた時間に手を握ったりしていました。無事に意識レベルが上がって話ができるようになったとき、患者さんは私を見るなり「いつも声をかけてくれて、手を握ってくれて、ありがとうね」と話してくれました。一見、意識がなさそうでも、患者さんがきちんと認識してくれていることがわかり、感動しました。

(大学4年 C.Kさん)

「患者さんとの大泣き」

30歳代の難病の患者さんを受け持ちました。友好的な関係性だったと思います。受け持ち始めてから2週間たったある日、突然、患者さんが「なんで私は、この病気になってしまったのかな…」とボツリ、ボツリと話し始めてくれたんです。「少し前に、同じ病気の知人が亡くなってしまって、正直に話すよね、死ぬのが怖いよ」と。その話を聞いているうちに、私も「どうして、よりによってこの人が病気になってしまったの…?」と、ただただ悔しくなりました。必死に泣くのを我慢していると、それが伝わったのか、患者さんも涙がポロリ…。結局、2人でワンワン泣いてしまいました。その後、「ありがとう。あなたに打ち明けられたおかげで、スッキリした」と言ってくれたときの患者さんの笑顔は、きっと一生忘れないと思います。その患者さんは、最後に「あなたの夢を聞かせて。これから何年先でも、ずっと応援したいの」と言ってくれました。もう患者さんに会うことはできず、状況もわからないのですが、数年経った今でもときどき、空を見上げて患者さんのことを思い出しています。

(看護師 E.Hさん)

メディックメディアでは、みなさんの実習エピソードを募集しています!

メールの件名・本文に以下の内容を記入して、kango@medicmedia.comまでご応募ください!

『INFORMA』に掲載された方には、図書カード3,000円分をプレゼント!

件名: ★わたしの実習エピソード★

本文: ●患者さんの性別・年齢・疾患(教えていただける範囲でOK) ●印象的だったエピソードの内容
●お住まいの地域 ●学年・職業 ●ニックネーム(イニシャル可)

